慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	抄物と日本語史研究
Sub Title	Summary of "Sho-mono" commentaries and its contribution for historical research of Japanese
	language
Author	柳田, 征司(Yanagida, Seiji)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2003
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.38 (2003.),p.61-99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第六回(二〇〇三年七月四日)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20030000-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

抄物と日本語史研究

田 征 司

柳

います。 ような機会を与えていただいたことに感謝しています。また、皆様暑い中をお出かけくださいましてありがとうござ 大沼晴暉先生をはじめ文庫の先生方のご指導をいただき、書誌学の講筵の末席を汚した者としまして、本日この

ただいまご紹介いただきました柳田征司でございます。今から三十年ほど前になりますが、斯道文庫で阿部隆一先

究する上でどのように有効な資料であるのかということの一端を申し述べてみたいと思っています。申し上げること 起きたと言えるのかということを考えて来ました。今日は、抄物という資料について、この資料が日本語の歴史を研 の要点は、日本語史研究資料としての抄物の価値が次の四点に認められるのではないかということになります。 と呼ばれる資料群を対象として、そこから時には奈良時代まで遡り、また、時には現代諸方言を展望して、一体何が ということを説明しようとして来ました。そのために室町時代から江戸時代にかけて禅宗の僧侶たちが作った「抄物」 私の専門は日本語の歴史で、日本語がどのように変遷して、今日我々が知っているような姿をしてここにあるのか

古代語から近代語への転換期の口語研究資料の一であること

東国語資料を含むこと

厖大な量の資料が伝存すること

原典に対する注釈であること

「資料としての抄物の研究」(武蔵野書院「室町時代語抄物の研究」(武蔵野書院 古代語から近代語への転換期の口語研究資料の一である、ということですが、その前に、 一九九八・一〇)という本の中で、抄物について定義しておきましたので、 先年書いた私の

それを読んでおきたいと思います。

「抄物(しょうもの)」とは、主として室町時代に、京都五山の禅僧、

博士家の学者、

神道家、

公卿、

医家、

足

れをも含み、仮名交り体の書入れのある資料は、これを「書入れ仮名抄」と呼ぶ。(中略)室町時代言語資料の る場合には「仮名抄」と呼ばれる。また、形態から見ると、一書の形を成した注釈書だけでなく、原典への書入 注釈書をも、これに含めるのが普通である。広くは漢文体のものを含めることもあり、これを除くことを明示す その中心となるのは講義の聞書として成立したものであるが、講義のための草案である手控や、講義を伴わない 利学校の庠主とその門下、曹洞宗の僧などが作成した、漢籍や仏典や、また一部の国書に対する注釈書をいう。

聞書を作る係の者がそれを記録して、後日整理して講義聞書ノートが作られるという形のものが本来の姿であったと 書紀』とかといったような書物に対する注釈で、本来は禅僧とか博士家の学者が聴衆を前にして注釈を口頭で語り、 抄物」というのは、 漢籍や仏典、また一部の国書、例えば『論語』『史記』とか、『無門関』とか、 あるいは 一日本

で、キリシタン資料・狂言とともに特に口語資料として価値が高い。

思われます。後になると、そういう講義を経ないで講義の口調で書かれたものが多くなって来ます。そういう資料が

「抄物」です。

キリシタン資料・狂言とともに特に口語資料として価値が高いということですが、(表1)を御覧下さい。

(表1)日本語史の時代区分と資料

	京畿			東国			
	万葉集・記紀		・防人歌	万葉集 東歌	奈良時代	古	
	(有り)			(無し)	平安時代	代	
	(有り)			(無し)	院政時代		古代
	(有り)			(無し)	鎌倉時代	中世	
抄物	狂言	キリシタン資料	(東国語系抄物)	洞門抄物	室町時代		
抄物	(有り)		洒落本・滑稽本	洞門抄物	江戸時代	近	近
	(有り			(有り)	明治以降	代	代

に入ると大きく転換しますので、院政時代から室町時代までを中世と呼んで、それ以前を狭義の古代と捉えることも 語を近代語と捉えてよいのではないかというのが国語学界の一般的な考え方になっています。そして、それは正しい 町時代の終わりと江戸時代の初めとの間に大きな転換点があって、室町時代までの言語を古代語、江戸時代以降の言 数百年の間に日本語に何が起きたのかということを考えてみると、いろいろな研究がされてきているわけですが、室 のではないかと思います。古代の中を更に分けると、院政時代から古代の言語が少しずつ姿を変えてきて、江戸時代 日本語についてある程度全体の姿がわかるようになるのは七世紀から八世紀の頃からですが、それから今日までの千

ています。文法史については、主格助詞の「が」が生まれたことで、「雨降る。」から、「雨が降る。」というように す。音便が起きたことによって日本語の音韻上のさまざまな変化が引き起こされたのではないかと考えるようになっ 「が」という格助詞が成立したということが最も大きな出来事で、文法史上のさまざまな出来事は、そのことがきっ 音韻史について言うと、音便が起きたということが最も大きな出来事だったのではないかと考えるようになっていま 古代から近代の間に何が起きたのかということを、私はこの十数年考えてきたのですが、結論だけを申しますと、

近代語への転換期の口語研究資料の一つであるということで大きな価値があると考えます。 することができるものと考え、これを対象として来ました。そのような意味で、「抄物」というのはまず古代語から 時代にかけて作成されており、この転換期の言語を観察すると、日本語の上に何が起きたのかということを明らかに 古代語と近代語とを分かつ時期が室町時代と江戸時代の間で、 抄物は、(表1)に見るように、 室町時代から江戸

かけとなって起きているのではないかと考えるようになっています。

言っていいと思われます。東国の言葉を知ることができる資料がかなりまとまって得られるというのが抄物であって、 す。東国で書かれた資料はないではありませんが、東国の言葉が反映しているかどうかということになると、 我々が持ってい 奈良とか京都の言葉のそれが主であって、東国の言語資料というのは江戸時代の後期にならないと多く出て来ません。 第二番目に、東国語資料を含むことということですが、我々が持っている資料というのは、主として京畿の言葉 平安時代・院政時代・鎌倉時代の東国の言葉がわかる資料はまずないと言ってよいのではないかと思われま る東国語資料の一番古いものは『万葉集』の東歌と防人歌であるわけですが、(表1)にあげてある

それは曹洞宗の僧によって作られた抄物で、「洞門抄物」と呼ばれています。これは東国語系の抄物で、この資料は 室町時代からあって、江戸時代にかけて作られています。これによって東国の言葉がどのような姿をしていたのかと

いうことを幾らか窺い知ることができるわけです。 その東国資料がどのような形で役立つかということを見てみようとしたのが、(図版1)の、現代方言における東

(国語学12 (図版1)牛山初男 [語法上より見たる東西方言の境界線について] 一九五三・七) 『東西方言の境界線』 (信教印刷 一九六九・三



図は、牛山初男さんという方の「語法上より見たる東西 西対立という、 有名な東西方言分布の地図です。 この地

界線が五つ示されています。東の方から見ると、 のところ、 版から取ったものです。 方言の境界線について」という「国語学」第12集に載 た論文が後に単行本に収められた時の、その単行本の 静岡市の東の方から山梨県の南をかすめて長 東西で違っている言語事象の境 駿河湾 図

界線を境にして東の方では、命令する時に「起きろ」と 野県の西をずっと上がって行く境界線があって、 します。次に、 「起きい」「起きよ」と「~イ」とか「~ヨ」の形で命令 「~口」の形で命令します。それに対して西の方では、 静岡市の西の方にー・ の線があって、 この境

長野県を南北に

九〇六年に出た国語調査委員会の『口語法調査報告書』(国定教科書共同販売所 んが、金田一春彦先生の「音韻」(東条操編『日本方言学』吉川弘文館 一九五四・一)という論文があげるアクセ た」と言うのに対して、西の方では「買うた」「習うた」と言うという境界線です。次に、 がっている境界線は、「買った」と「買うた」の対立で、東の方ではワ行動詞の音便に促音便を使い、「買った」「習っ を使うという境界線がそのようになっています。次に、同じく伊勢湾から岐阜県の西を通り、富山県の南を通って上 というのに対して、 方の言い方で、それに対して西の方では「白なる」とか「白うなる」と、ウ音便形を使います。次は、 線を通って新潟県を南北に分かっています。これは形容詞の連用形の言い方で、「白くなる」と原形を使うのが 「ナイ」と言うのに対して、その境界線より西の方では「行かん」「知らん」と、「ヌ」が変わった「ン」を使うとい てみようとして調査したところ、ほとんどその境界線が違っていなかったということです。 されていたことであって、 海側に書いてあるのですが、伊勢湾の所から岐阜県の南を通って……の線が上がっています。東の方で「今日は雨だ。」 う境界線です。次に、ずっと西の方へ行って、三河湾のところから×印の線が上がっていて、長野県と岐阜県の境界 分かって北へ上っています。これは打消しの助動詞の言い方で、その線から東の方では、「行かない」「知らない」と ントの全国分布図を見ると、東京式アクセントと京阪式アクセントの境界線というのは、今の地図に重ねてみると、 「買った」「買うた」というワ行動詞の連用形の東西の違いの境界線と重なっています。実は、このような事実は、 そのような東西の違いというものに対して、どうしてそういう境界線を境にして東の方と西の方とで言葉が違うの 西の方では「今日は雨じゃ。」とか、あるいは「今日は雨や。」というふうに「ジャ」とか「ヤ」 牛山さんは五十年たった時点で、その境界線がどのように動いているかということを調べ 一九〇六・一二) 地図にはあがってい で既に明らかに 違いが、 日本 、ませ

音優位の西部方言という解釈がなされて来ました。平たく申しますと、東部方言は子音を好む方言であり、それに対 かということについて、我々国語学の方でどのような考え方がされてきたかといいますと、子音優位の東部方言と母 して西部方言は母音を好む方言であるという、そういう解釈です。(表2)に例をあげておきました。

(表2)東部方言「子音優位」西部方言「母音優位」という解釈

	ワ行動詞連	神連用形			形容詞連四	用形			:	
東部方言	促音便	katta			原形	siroku				
		子母子子母	子 3	母 2		子母子母子母	子 3	母 3	:	子音優位
西部方言	ウ音便	koota			ウ音便形	siroo				
		子母母子母	子 2	母 3		子母子母母	子 2	母 3 ::	:	母音優位

列島の上に広く住んでいたところへ、母音を好む人が近畿地方を中心に勢力を広げていったのだけれども、東の方に 西の方とで違っているというように、 言葉の問題だけでなくて、指紋とか血液型も東の方の人と西の方の人とで違い、遺跡から発掘されるものも東の方と 言葉は子音を落とさないで大切にしているのに対して、西の言葉は「siroo」というように子音を捨てて母音が残っ あって、母音が二つであるのに対して、「koota」というウ音便の方は子音が二つで、母音が三つというように子音 ているということで、東と西の言葉というのは、子音を好む東の言葉と、母音を好む西の言葉と捉えられて来ました。 と母音の多少が逆転しているというわけです。形容詞の連用形についても、「siroku」というように原形を使う東の 番顕著な例は、ワ行動詞の連用形の「買った」と「買うた」の違いで、「katta」という促音便の方は子音が三つ 人類学・考古学・民俗学などの成果を利用して、もともと子音を好む人が日本

そのような解釈が出て来たものと思われます。 最近違って来たというようなものではなくて、奈良時代、または、更に遙かに古い時代から違っていたのだと考えて、 所で違っているということがあって、一方、『万葉集』の東歌、防人歌を読んでみると、どうも東の言葉というのは うな解釈というのは、 た。多くの人がそういう立場をとっていて、ほぼ通説になっていたと言っていいのではないかと思われます。そのよ は十分にその勢力が及ばなくて、子音を好む言語が東の方に分布しているのではないかというふうに説明して来まし 現代方言の分布において東と西とが顕著に違っていて、それが五十年たっても動かない で同じ

2 ます。それらを今日残っている抄物と比べると、「萬安鈔」「自雲抄」が別にあって、今、図版にあげた抄物が「春夕 集成一』(井上書店 門抄物でそのような言語事象がどのようになっているのかということを少し見てみたいと思ってあげたのが、(図 西とで違っていたというふうに即断するわけにはいかないと考えられます。そこで、東の方の言語が幾らかわかる洞 確認してみる必要があります。そのことを抜きにして奈良時代と現代の方言分布だけをもって、もとから言語が東と じようにワ行動詞について東の方が促音便で西の方がウ音便であるというふうになっているのかどうかということを 「同萬安鈔」「同自雲鈔」とあって、 図版には寛永一〇年整版で巻上三丁表と三丁裏をあげています。 の資料です。この図版は雪庭春積という曹洞宗の僧が『無門関』を注釈したもので、『無門関抄』という抄物で 抄物という、 一九八七・一二)の『寛文無刊記書籍目録』を見ると、「無門關」とあり、 東の方の言語が幾らかでもわかる資料を持っている以上は、これら中世の資料でもやはり同 江戸時代寛文年間頃に広く行なわれていた無門関抄に三種類あったことがわかり 斯道文庫で編纂された『時代書林出版書籍目録 ついで「同春夕鈔」 版

鈔」であることがわかります。これは私がはじめて指摘したことではありませんが、この抄物の中に、「江-村月_落

狗子佛性 全提正令 繼張有無 喪身失命 法燭一無便者 頌日

イニヨムナリ、靈恐ら同シテーと且道如何是祖師ノ関と水 草葉木葉えくサブル車類に成れ也精要ハニ字モニ。タニ 本心也。本心二时多力妙悟也。叔子祖関不透心路絕也世 意解ノ起プス也是ラ奏心ト云す。意解ノ起ラが上時もが 心路絶しる窮たしる肝要しせていい路下いいつり、毛と 無門ノ云参禪ハ類ノ祖師ノ関ラ透うデハ妙三悟トラハ 下,飽滿休歌世又者方。死又後或八草二依小或八木二附了 大盡人是依盡した也。云心八。生死透脱人時節二锋

アルコンキトナルか是耳自ラ開イタ即三八豊不慶快コロコ か。座下ニモ此ノ関ラ透いられ者がしかんから接着る透明 バンろいヨーコトデハアんことする莫有要透関底感下いの我 同一事二階个八趙州歷祖ノ見聞、自也ノ見聞、差别 代ノ祖師下手ヲ取ジラ、共一可行しト也云心ハ。確代祖師 ノ者八但親趙別ノ本位二就名計リデスなことも、便午杯 開之也。此人故二遂二見之月一禪完無門関小也。透得過 ト。ニツハアルマンキゾト云義也看毛相緒シデ、同一眼二見 下工で投る界見一筒ノ無ノ字が宗門ノ第十関ダント・手ラ

(図版2) 雪庭春積講『無門関抄』 實永10年整版 上3丁表

(愛媛大学附属図書館蔵)

不審だと書いてありますから、春積が講義をし、

誰かが聞 て

ということで、春積の説明だけれども、この説明はどうも

春積という名前が出ています。 「春積の舌」 は春積の言葉 ナレモ。不審在」之。」(寛永一〇年整版上37ウ)とあって、 正堪、眠ト云着ー語ヲ以。注破ナサル、ナリ。是ハ春積カ舌

「積」を書くこともあり「夕」を書くこともある僧で、 はどのような僧であるのかということですが、春積と、 そのことをここに挟み込んでいるものと見られます。 書をして、その聞書をした人が春積の説に疑問を抱い

今もある寺院ですが、私はまだそちらにお邪魔して資料と であったということがわかっています。東竹院は熊谷市に か過去帳とか拝見するようなことを怠っています。寛永元 六二四年に亡くなっていますが、武蔵梅龍山東竹院第四 世

かよくわかりませんが、どうも武蔵の曹洞宗の寺の僧であっ 九二九・六)の中に翻刻されています。 生まれがどこなの

も遺していて、これは『埼玉叢書』の第三巻

(三明社

年撰の『武州大里郡梅龍山東竹院記』という短い文章など

えナント・レダグート。通身二疑團ヲ起ス箇ノ無字ス参当下 シキ丁也。三百六十人骨節。小萬四千人電飯ヨい白汗ラ州 底ラ見也。然圧此ノ関ラ透ごろ、樂々し、大子介ノハナルマ

|図版2)に戻って、まず三丁裏をご覧いただきますと、その一行目に、「只是一-箇ノ無ノ字ガ。宗-門ノ第-一-関 手ヲ開ク也。」とあって、断定の助動詞「ダ」が使われています。この資料では断定の助動詞には 東国系抄物の特徴を示しています。ところが一方、三丁表をご覧いただきますと、うしろから四行目に、

「生ー死透ー脱ノ時ー節ニ逢テ。飽ー滿休ー歇セヌ者カ。死メ後。或ハ草ニ依リ。或ハ木ニ附イテ。草ー葉木葉ヲ。ムサブ ル虫-類ト成ル也。 精-靈ハ二子子にこ。タマシイト。ヨムナリ。靈魂ト。同シキナリ。」とあって、「時節ニ逢テ」と

して使われますから、ここは「逢ウテ」とウ音便が記録されているということがわかります。ここのところは現代の 「逢」という字の右に小さく「フ」という送り仮名がついています。この時代には「フ」と「ウ」という仮名は通用

東の方の資料であるならば、「時節ニ逢ッテ」と促音便になっていないといけないところです

— 70 —

はないというふうになっていて、 現代語で東の方に特徴的な言語事象がどのように現れるのかということが次々と調 けれども、

ウ音便になっているということです。

東西の分布で言うと、

査がされて来ました。その例を挙げたのが(表3)で、外山映次さんの「足利学校蔵人天眼目抄とその国語」(国語 一九六〇・一二)という論文です。この論文は足利学校に所蔵されている『人天眼目抄』という抄物が、

東の方の抄物のように見えるけれども、その中に東に特徴的な言語事象がどのように現れているかということを調べ たものです。表をご覧いただきますと、左の端に1から8(9~18略)とあり、そこに「助動詞ベイ」、「助動詞ナイ」、

- 形容詞連用形原形」 「ハ行四段連用形促音〔便〕」 「二段活用の一段化」 「命令形につくロ」 「借、足の一段化」 「助動

このように洞門抄物には、断定の助動詞には「ダ」が使われているのですけれども、 ワ行動詞は必ずしも促音便で

(表3)外山映次「足利学校蔵人天眼目抄とその国語」より

	(20) // (20)										
				(A 君	≢)		(A'	群)	(B	群)
`		N	Αı	A 2	А 3	A 4	A 5	A' 1	A' 2	Ві	В₂
		人	禅	巨	大	太	高	三	雑	毛	史
		天	禅宗無門	海	淵	淵和	国	河	兵	<u>-</u>	華若
		眼目	門	代	代	尚再吟	代	物	物	詩	中華若木詩抄
		抄	関抄	鈔	鈔	吟	鈔	語	語	抄	抄
1	助動詞べイ	0	×	×	0	0	×	×		0	×
2	助動詞ナイ	×	×	×	×	×	×	×		×	×
3	形容詞連用形原形	•	•	•	•	•	•	•		0	•
4	ハ行四段連用形促音	×	O .	0	0	0	0	0		0	0
5	二段活用の一段化	0	×	0	0	0	0	0	0	0	0
6	命令形につく口	×	×	×	×	×	×	×	•	×	×
7	借、足の一段化	0	×	×	0	0	0	×	×	×	×
8	助動詞ダ	•	•	•	•	•	•	0		×	×

Ц

も用例は認められない。

助動詞は

「ダ」が使われて

行四段連用形」

は用例が認められない。「命令形につく

用形」は原形で「白く」という形で使われている。

·助動詞ナイ」はこの資料には認められない。「形容詞連

(以下表略)

(凡例) ●固定 ◎対立 ○用例あり ×用例なし

令形につくロ」は用例が認められない。 連用形は、 用形」は原形で使われている。 年の古活字版を使って調査されています。それによりま 先程見た 図版は寛永一〇年の整版ですが、 「助動詞ナイ」は用例が認められない。 (図版2)、雪庭春積の『無門関抄』です。 促音便とウ音便と両方が使われている。 「ハ行四段活用動詞」 外山さんは元和 断定の助動詞に 「形容詞 た 0 連

どのようになっているかを外山さんが調べられたところ、あった言語事象です。その言語事象が『人天眼目抄』でそのうちの2~4・6・8の五つが(図版1)の地図に詞ダ」と八つの項目(原論文十八)があげられています。

その次の所にAと

あって、「禅宗無門関鈔」があがっていますが、これが

いるというデータが出されています。

歴代ノ祖師トモチタ取らテリニ可行しト也云心小既代婚過ノ者八祖親趙州ノ本位二就名計リテハアルで不便

(図版4)同寛永元年古活字版 大学図書館蔵)

下工一撥以只是一局ノ無ノ字力宗門ノ第一関タソト手ョイトヨムナリ聖城ト同シキナリュ 通如四是祖師ノ關ト庫

ノ者ハ但親趙州ノ本位二就タル計リテハアル下して便子思開ク也此ノ故二遂二日之ク日禅宗無門関ト也遊得過

草栗木雅ラハサフル虫類ト成ルカ精 饗八二字モニタ下レテ飽縮体歌せ又省カ巫ノ後或八草二使り或八木二附ィテ

し八藍少是依一颗トナル也云心八生足透脱ノ時節二俸本心也亦心二叶ラカ妙情也扨子祖関不透心路绝世

意酬ノ起之云也是少安心ト云ナリ意解ノ起ラサル時中力

(駒沢

絶了ラ第ムルーラ 肝要トサテハ心路トハ心ヨー色ケノ

(図版3)雪庭春積『無門関抄』元和 八年古活字版(東京大学国

そのほかA・A・A・Aと洞門の抄物でそれらの言語事象は「ダ」が使われているということが報告されています。

うことを示したものです。元和八年古活字版を見ると、六なっていた所が、古活字版でどのようになっているかとい版をあげたところと同じ本文の部分で、「時節ニ逢テ」と

古活字版をあげておきました。これは先に寛永一○年の整

植えるということが困難で、送り仮名はついていません。ません。古活字版ですから、そういう小さい活字を行間に行目に「二逢テ」とあって、「フ」という送り仮名はあり

寛永元年古活字版を見ると、そちらの方でも四行目ですが、

10日 日日日日

師「二ツハアル下シャント云義も看毛相結」テ同、眼二見代ノ祖師トモチラ取ツテ俱二可行シト也云心八壁代祖

- 72 -

「時節二逢テ」となっていて、「逢ウテ」なのか「逢ッテ」なのかわからないという形になっています。

(表4)雪庭春積講『無門関抄』のワ行動詞連用形の音便

ワ行動詞連用形	促音便	ウ音便	出 拠
元和八年古活字版	七例	一七例	外山先掲論文(一九六〇・一二)
寛永一○年整版	一例	四八例	金田弘「国語資料としての洞家カナ抄物の性格」(国学院大学紀要10 一九七二・三)
正保三年整版	八例	四四例	大塚光信「「ダ」とある種の抄物」(国文学攷21 一九五九・七)

データをとっておられ、今紹介した元和八年古活字版について促音便になっているか、ウ音便になっているか、「買ッ 便とウ音便の比率というのは、整版になるとずっとウ音便が多くなっているということが顕著です。 どの資料もウ音便を用い、促音便も用いるというふうに両方用いているという点では共通しています。しかし、促音 初の論文ですけれども、大塚光信さんの論文で、促音便は八例、ウ音便は四十四例となっています。これを見ると、 ます。それから、正保三年整版を使ってデータを出した論文が、 とウ音便の現れ方を数えたのが金田弘さんの論文で、それによると、促音便は十一例、ウ音便は四十八例となってい すと、促音便が七例、ウ音便が十七例となっているということが報告されています。寛永一○年整版を使って促音便 テ」という形で出てくるか、「買ウテ」という形で出てくるかということを調べたのが外山さんの論文で、そうしま 次に(表4)をご覧いただきますと、実は雪庭春積の『無門関抄』の今のような言語事象については、三人の方が ――実はこのようなデータを取ることをした一番最

おく必要が出て来ます。それで雪庭春積の『無門関抄』にどのような本が伝わっているのかということを知られる限

そうしますと、『無門関抄』に限らず、このような資料から用例を確認するためには、まず、その諸本を整理して

(資料1) 雪庭春積講 『無門関抄』 の諸版

古活字版 元和八年版 東大国語・土井洋一氏 (積翠・小汀・弘文荘旧蔵)・日光天海蔵

寛永元年版 駒沢大・成簣堂

寛永二年版 広島大・成城大 (亀井孝氏旧蔵 乱れ版

寛永五年版 東大国語

寛永八年版 土井洋一氏 (存巻下)・東大図旧蔵

寛永初年版 寛永二年版 (覆寛永二年版) 九州大・奈良女子大・大塚光信氏 東大国語·柳田聖山氏旧蔵

整版

いずれか未詳 松ヶ岡・叡山・大正大

寛永一〇年版

島根大(相坂一成氏旧蔵)・島根大(相坂一成氏旧蔵

愛媛大・駒沢大・駒沢大・京都大・京都大・京都大(寿岳章子氏旧蔵)・

亀井孝氏旧蔵

寛永一〇年版無刊記後印 広島大・早稲田大・龍谷大・花園大図・松ヶ岡・松ヶ岡・山田忠雄氏旧蔵・金

田弘氏

正保三年版万治元年印 正保三年版 筑波大·駒沢大·禅文化研·山内洋一郎氏·福島邦道氏

東大国語・高羽五郎氏カ

大・大正大・禅文化研・禅文化研・柳田聖山氏旧蔵・松ヶ岡・山田忠雄氏

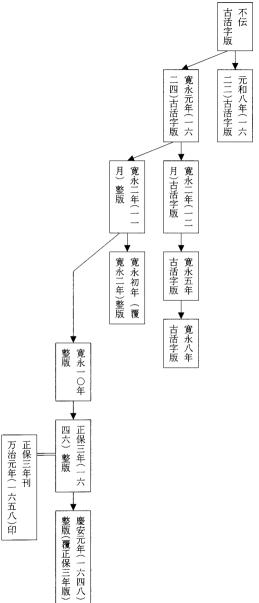
見た限りの整版のどの版とも違う版木で彫られたものになっています。寛永二年古活字版は二本残っていて、もう一 写本は今のところ一本も見つかってなく、古活字版に、元和八年版・寛永元年版・寛永二年版・寛永五年版・寛永八 本残っていますので、 本が成城大学にあります。成城大学の本は亀井孝先生が持っておられた本ですけれども、 れ版で、広島大学の本で見ると、序第六丁と巻上第二丁と第三丁とが整版になっています。そしてその整版は、 が十一月というように一ヵ月早く整版の方が出ているということで、ほぼ同じ時期に古活字版と整版とが作成されて ですが、整版は、寛永二年に早くも出て来て、古活字版の寛永二年版と同じ年なのですが、古活字版が十二月、 年版という五種類が残っていて、一年から三年ごとに新たに組んで印刷していることがわかります。 しかし序の第六丁と巻上第二丁とは広大本と同じ整版が交えてあって、乱れ版と認定していいと思います。うまく二 いて、印刷史の研究、書誌学の研究上は興味深いことなのではないかと思われます。 後から整えられたものではなく、出版の段階で整版がその中に入っていたと考えてよいのでは しかも寛永二年の古活字版は乱 巻上第三丁が欠けています。 一方、 整版の方 私の

あって、それ以後寛永一○年整版無刊記後印本・正保三年版・正保三年整版万治元年印本・慶安元年版というような け加えることがなく、古活字版の形をそのまま踏襲しています。送り仮名や返り点が入ってくるのは寛永一○年版で 方、寛永二年の整版ですが、これは、せっかく整版をつくりながら整版の長所である送り仮名や返り点などを付 ないかと思われます。

整版が行なわれています。それぞれの本を比較して、どのような影響関係にあるかということを図にしたのが (図版

5) です。

(図版5)雪庭春積講『無門関抄』諸版の関係



作られながらそれには返り点や送り仮名等が加えられていないなど、注目されることがいろいろあります。 古活字版と整版とが並行して行なわれている時期があったり、あるいは古活字版の一版が乱れ版であったり、

どのように成人した人であるのかということを、私はまだ調べていませんが、少なくとも京都で本屋さんをしていた は中野市右衛門である可能性が高いのではないかと考えられます。その中野市右衛門という人が一体どこの生まれで、 よると、ただ書物を出版するというだけでなくて、学問的にも深いものを持っていた人のようで、傍音訓をつけたの 九七〇・一一)や、安藤武彦さんの「出版書林中野道伴伝関係資料」(日本古書通信40(8) 一九七五・八)などに ということがわかります。中野市右衛門は、亀井孝先生の「中華若木詩抄の寛永版について」(方言研究年報13 人です。そうしますと、古活字版に「時節ニ逢テ」とあるところを「逢テ」と「フ」という送り仮名を横へつけたの 傍音訓・返り点が付けられるのは寛永一○年の整版ですが、この版は、刊記によって、中野市右衛門の整版である 京都の人である中野市右衛門が、自分の京都の言葉でつけた可能性が高いと考えてよいのではないかと思います。

せん。そのためにはできるだけ諸本を整理して、どのような姿が元の姿であったのかということをできるところまで ないわけで、我々としては目に触れる資料から、元はどんな言語であったのかということを透かして見るしかありま もともとの、雪庭春積なら雪庭春積という人が講義をしたときの言語がそのままそこに再現されているということは 右衛門のせいではないかと考えられます。

どの資料でも常にそうであるわけですが、文字で書かれ、

あるいは出版されたものというのは変容しており、

そうしますと、先にあったように、整版でウ音便の例が多くなってくるのは、整版の段階で送り仮名をつけた中野市

あろうと思います。そうしますと抄物というのは、第三番目として、厖大な量の資料が伝存しているという長所をもっ その一方、解釈を妥当なものにしていく方法としては、できるだけ多くの類似の資料でデータを得るということで 追いかけておく必要があります。

てきているものと見られます。 けではなくて、ウ音便も併用している時期があって、やがてウ音便を捨てて促音便になっていくという方向に変わっ というきれいな対立をしていたわけですけれども、時代を遡って室町時代と江戸時代の抄物を見てみると、促音便だ ができるのではないかと考えます。(図版1)の地図に見るように、現代方言では東の方で促音便、 時代に入って次第にウ音便を使うことが少なくなって、促音便の多用の方向へ変わってくるという変化を捉えること 報告したデータだけで全体の変遷を捉えることは十全ではありませんが、ちょっと退いて全体の傾向を見ると、 多用するというふうになっています。ここで見た資料は、先程申し上げましたように、先学が調査した資料で、 が多いのですが、促音便の方を多く使う資料がかなり見えて来ます。そして、江戸後期の洒落本を見ると、促音便を 程申しましたように、 ていますので、ほかの洞門抄物ではワ行の音便がどのような形で出て来るのかということを見ることが可能です。 たま調査されたものを時代順に並べてみたにすぎません。もっとたくさんの資料を補うことができるわけで、先学の ると、いろいろな現れ方をするわけですが、促音便とウ音便との多少に注目してみると、慶長以前成立の洞門抄物に ウ音便の現れ方の変遷がわかります。洞門抄物を慶長以前成立の資料と元和以後成立の資料とに分け、江戸後期の資 ことを報告する論文が数多く生まれました。それらに報告されたデータを資料の時代順に配列してみると、促音便と ついては、ほとんどの資料がウ音便の方を多用しています。 ジャンルが変わりますが洒落本のデータが報告されているので、それを利用することにします。そうす 洞門抄物を見つけて来て、その資料に東国語と見られる言語指標がどのように現れるかという 元和以後の資料になると、やはりウ音便を多用する資料 西の方でウ音便 たま

今後は、この洞門抄物を整理して、

どの資料とどの資料とを調査すればほぼ変化を捉えることができるのかという

るのかわからない例も加える必要があります。しかし、 りません。 んから、これが逆転する可能性もあるので、データを取るときには、どちらか判断できない例の数もあげなくてはな の送り仮名がつけられたとしますと、十一対四十八という比率で、その上に単純に加算されるという保証はありませ に、送り仮名がついてなくて、促音便なのかウ音便なのかわからない例が百四十例あります。その百四十にどちらか 抄』に例をとると、寛永一○年版で前者十一例、後者四十八例となっていますが、実は古活字版のところで見たよう 資料を整理する必要があると考えられます。それから、先学のデータは促音便とウ音便の例が、雪庭春積の『無門関 語を学習した資料ですから、非常に口語度が高いと考えられます。そのキリシタン資料を見ると、 ン資料があります。 ではワ行動詞の音便がどのような形で現れるのかということですが、これについて知ることのできる資料にキリシタ て来るということなのではないかと考えられます。 抄物の有効性の第四番目に話題を進めます。まず、東の方の資料に対して、 残念ながら現在のデータは、どちらであるのかわからない例は示されていませんので、今後、どちらであ キリシタン資料は、 宣教師たちが日本人の懺悔を聞いて、それに適切な助言を与えるために日本 全体の変化としては、時代が下がるにつれて促音便に変わっ 西の方の室町時代から江戸時代の資料 ワ行動詞はまず百

同じようにウ音便専用となっています。 パーセントと言っていいくらいウ音便になっています。現代の我々が西の方で使っている形と同じで、地図の分布と 抄物でも同様で、竺雲等連講桃源瑞仙聞書『漢書抄』(一四五八~六〇年講)から一例あげておきました (図版6)。

(図版6)竺雲講『漢書抄』(京都大学附属図書館蔵)一4オ

アトラ我大人テハナーカラ 面えりにようシーランスー利後と我カララフをつきトルナーマラとら 三十名一指三野一一時间到一五公丁ノハランとでようとろう以前公院、新項或者与馬

「ムカッテ」ではなくて、「ムカウテ」とウ音便になっています。このように抄物の、片仮名交じりで注釈している部 分ではウ音便がほぼ高い割合で用いられています。ところがそれに対して、(図版7)ですが、

(図版7)竺雲講『漢書抄』(同前)一8ウ

後十二後一人小了一子子事了兵成有先聲而後奏先降落屋はしいる」

文によれば、『仮名書き論語』などでもワ行動詞に促音便が使われているということが指摘されています。漢文を読 れて、『論語』、『孟子』などの訓点資料を見ると、それらでもワ行動詞は促音便になっています。坂詰力治さんの論 を見ると、その原漢文の部分ではワ行動詞を促音便で訓読するというのが一般です。そのほか室町時代の、抄物を離 む時には室町時代では、それから江戸時代もそうですけれども、「向かって」「習って」などと促音便を使っています。 カタ燕路ニムカウテ」とは訓読しないで、「北ノカタ燕路ニムカツテ」と促音便で訓読しています。室町時代の抄物 『漢書抄』に原文が引用してあるところを一ヵ所だけあげておいたのですが、『漢書』の原文を訓読する時には 平安・院政・鎌倉時代はどうであったのかということを調べると、これはなかなか厄介で――というのは院政時代、

ないものが多くあります。 の用例が見つかっていて、

す。そういうことを言うのに、抄物の場合、抄文のほかに原典があり、その原典の訓読というものがあることが有効 そうしますと、東の方でも西の方でも、ワ行動詞の音便には促音便もウ音便も使っていたということになって来ま 代の話し言葉ではウ音便になっているけれども、一つ時代を遡ったら、その時代は話し言葉で、「向って」「習って」

というように、促音便が行なわれていたと考えるべきものと思われます。

典を持っているということはなかなか厄介で、 トそのものが時代とともに動いていて、その原典を整備することもしなければならないということで、厄介です。 その仏典に何が書かれているのかを理解することが難しいことが少なくありません。 原典の訓読と抄の言語とを対比することによって、先に述べたようなことが明らかになってきます。 抄物を読む時原典を読むのがなかなか大変です。 特に原典が仏典であ また原典のテキス

ともあるということです。 かし、大変なことがある一方で、今見たように、原典を持っているということが言語を研究する上でプラスになるこ

げたのですが、それがどうして、はじめの地図にあったように、現代の方言では東の方で促音便、西の方でウ音便と なくてはならないと思い、(表5)と(表6)を用意しました。 いうような対立を示すことになっていったのかということの説明が必要になります。そのことにも簡単に触れておか 今、時代を遡ると東の方でも西の方でもワ行の動詞の音便に促音便もウ音便も両方使っていたということを申し上

(表5)ワ行動詞の音便の現れ方(>・<は不等号)

促音便	その他					方言
ウ音便	語幹一音節語					山陰·沖縄
				促音便(漢文訓読)		
	ウ音便専用	ウ音便専用	ウ音便専用	ウ音便専用(口語)	(促音便・ウ音便)	西部方言
	促音便専用	ウ音便へ促音便	ウ音便>促音便	ウ音便>促音便	(促音便・ウ音便)	東部方言
	現代	江戸時代後期	江戸時代前期	室町時代	平安・院政・鎌倉時代	

時代には西の方でも促音便を口語で使っていたのではないかと考えられるということを申し述べました。江戸時代に 語ではウ音便であった。漢文を読む時は促音便を使っているということで、ここから推定すると、平安・院政・鎌倉 ではウ音便と促音便と両方使っていて、ウ音便を多用している。西の抄物を見てみると、抄文ではウ音便専用で、 (表5)はワ行動詞の音便の現れ方の変遷を示したものです。室町時代のところをご覧いただきますと、 洞門抄物では次第に促音便専用の方向へ向かって動いており、それに対して西の方ではウ音便専用のままで 東国の抄物 口

促音便が起きて「習って」という形ができ上がって来る。併用している原形「習ひて」が、いわゆるハ行転呼音を起 えば「買う」はウ音便となり、その他の語幹二音節以上の語、例えば「習う」は促音便になるというように二つに分 かれています。どうしてそういうことが起きたかということですが、「習ひて」という動詞に例をとりますと、 現代に至っています。更に山陰方言と沖縄方言をそこに加えますと、それらの方言では、語幹一音節語はウ音便、例

も、促音便は夕行とラ行の動詞に先に起きていますので、例えば「勝って」「借って」と言っているところに、ハ行の で、促音便が早く生まれ、後にウ音便が遅れて成立したと考えられます。はじめに促音便が生まれたわけですけれど

こして、「習ゐて」という形になり、その形から「習うて」という形になって、ウ音便形が生まれてくるということ

使うという状態になっていたのに対して、東の方の言語状況ではウ音便と古い促音便とを併せ使っているというよう ですが、ウ音便形を使う方向へとって変わって行く。そうして、室町時代の時点を見ると、西の方ではウ音便だけを ける形としてウ音便が出て来たものと考えられます。そのようにして東の方も西の方も促音便形が行なわれていたの 動詞の「買う」などの場合にこれが「買って」となると、「かって」という語が三種類できてしまうわけで、それを避 な状態にあったと考えられます。その時に、オ段長音の開合の合一ということが起きて来ます。(表6)をご覧下さい。

(表6) オ段長音の開合の合一とハ行動詞の音便

語幹	合音 Φir	語幹	開音 nara	開合
語幹= Φiro	Φiro:te(拾うて)	語幹= nara	naro:te (廻うて)	開合の区別あり
語幹= hiro,hira	hiro:te	語幹= nara,naro	naro:te	開合の合一

す。それに対して西の方言では、もう室町時代にウ音便を専用するようになっていたので、ウ音便を捨てるわけには 行なわれ、江戸時代の間をかけてウ音便が捨てられて促音便になっていくということになったのだろうと考えられま うことがわかり、それから、口の開きの狭い合音 ο: が聞こえてくると、その動詞の語幹は Φiraではなくて Φiroで べてみると、 いかなくて、 東の方言では、 は語幹が動揺する都合の悪い形になったということで、ウ音便を捨てることになったものと考えられます。この時、 のか、「ひろう」なのか「ひらう」なのかがわからなくなるということが起こって来ます。つまり、ウ音便というの 「習うて」のro:も、「ひろうで」のro:も同じ音になってしまうと、この動詞の語幹は「ならう」なのか「なろう」な あって、終止形は「ひろう」であるということがわかっていたと考えられます。ところが開合の区別がなくなって、 という口の開きの広い開音 2: が聞こえてくると、その動詞の語幹は nara であって、終止形は「ならう」であるとい の狭い o: で、室町時代までは、この二種類が区別されていました。この二つの音が区別されている間は 「習う」という動詞ですと、「習うて」という口の開きの広い開音の ɔ: で、「拾う」の方は「拾うて」という口の開き 以上、ワ行動詞の促音便とウ音便とは現代方言においては東西で対立して分布していますが、抄物などの資料を調 やむを得ずウ音便を今日まで使い続けているということになっているのだと考えられます。 室町時代と江戸初期まではそのような対立はしていなくて、オ段長音の開合の混同が原因となって東西 ウ音便のほかに促音便を併用していたので、ウ音便を容易に捨てて促音便に変えていくということが 一習うて」

今後は抄物を整理して、こういう言語事象の時にはどの資料とどの資料とを調査したらよいのだということを整備す 抄物には厖大な資料が伝存しているということに話を戻したいと思います。先に見たようなデータを取るにしても、 の違いが成立していったのではないかということになります。

る必要があるわけですが、抄物の全体像を、私が今のところ捉えている範囲内で見たものが (資料2)以下です。

『無門関抄』の雪庭春積のものを見ましたが、『無門関』の抄物には五種類のものがあります。

(資料2)『無門関抄』の種類

A、洞門僧の手になる抄物

○川僧慧済抄【無門関抄】 (写)岸沢文庫・岸沢文庫 安藤嘉則「川僧慧済の語録と無門関抄」(『松ヶ岡文庫研究

年報』13) に翻刻されている。

○天英祥貞抄『無門関抄』

(写)駒沢大学(忽九九)

○雪庭春積講 「無門関抄」 (刊)元和八年古活字版ほか 柳田聖山・椎名宏雄『禅学典籍叢刊第九巻』に寛永二年整版が影印されている。 中尾良信『禅籍善本古注集成無関門』に寛永古活字版が、

また、『抄物小系』に寛永一○年整版が謄写されている。

(写)京都大学図書館(1-25ム-2)

○抄者未詳

「無門関註」

○銕岺快牛講『無門関抄』 (写)駒沢大学(一四五-一四) 『禅門抄物叢刊』第一六に影印されている。

○抄者未詳『無門関抄』 (写)吉川泰雄氏 金田弘 『洞門抄物と国語研究』と資料』に影印されている。

○抄者未詳 「無門関抄」 (写)肥前円応寺

○喝外正余問答『無門関抄』 (写)駒沢大学 (写)亀井孝氏・金田弘氏・松ヶ岡文庫

『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集』

○雷沢宗梭抄才応宗芸補抄『無門関抄』

に松ヶ岡本が影印されている。

○抄者未詳 『無門関抄』 (写)山田忠雄氏

○抄者未詳『無門関抄』 (写)高山寺 (二種を一冊に書写) 『平成十四年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報

告論集』に一部翻刻あり。

(写)駒沢大学(魯九八)

○貫之梵鶴講『無門関鎖解』

○抄者未詳 『無門関抄』 (写)駒沢大学(一四九-一五) 『禅門抄物叢刊』第一六に影印されている。

○抄者未詳『無門関抄』 (写)広沢寺

○抄者未詳『無門関抄』 (写)駒沢大学(忽一六二)・駒沢大学(一四五-七)

(上田女子短期大学紀要19 一九九七・三)に翻刻されている。

大橋敦夫「長野市松代町長国寺所蔵

『無門関

四十八則』翻刻

〇西柏抄『禅宗無門関抄』 (刊)延宝三年整版ほか 中尾良信『禅籍善本古注集成無門関』に覆延宝三年整版が、

(写)群馬県双林寺·埼玉県西光寺

柳田聖山・椎名宏雄『禅学典籍叢刊第九巻』に延宝三年整版が影印されている。

○勝国良尊抄『無門関代語抄』

〇布国等瑞伝授『無門関抄』

(写)長野市長国寺

洞門僧の影響によって作られた抄物(浄土宗僧

В

○霊誉円応講『無門関抄』 (写)春日和男氏 田籠博 『五逆秋 (無門関抄)本文と解題』(自家版 一九八七・三)

善本古注集成無門関』に影印されている。

(写)駒沢大学(一四五-一三)

『禅門抄物叢刊』第一六、ならびに中尾良信 『禅籍

に翻刻されている。

○抄者未詳『無門関抄』

86

- C、大応派僧の手になる抄物(大徳寺・妙心寺)
- ○抄者未詳 『無門関抄』 (写)東福寺霊雲院・東福寺霊雲院
- Ď 幻住派僧の手になる抄物(九州

○湖心碩鼎講策彦周良聞書『無門関抄』 『策彦和尚初渡集』所収

○規伯玄方抄『禅宗無門関鈔』 (刊)慶安三年整版

『禅学典籍叢刊第九巻』に影印されている。また、鷲尾順敬『国文東方仏教叢書

中尾良信『禅籍善本古注集成無門関』、

柳田聖山・椎名宏雄

註訳』に翻刻されている。

○抄者未詳 『禅宗無門関抄』 (写)積翠軒文庫旧蔵

Ę 素性未詳の抄物

○抄者未詳『無門関弁注』 (写)松ヶ岡文庫

(写)建仁寺両足院

○伝万安英種抄『無門関抄』

○抄者未詳『無門関抄』

(刊)寛永一四年整版ほか 宏雄『禅学典籍叢刊第九巻』に影印されている。また、『抄物小系』に謄写され 中尾良信『禅籍善本古注集成無門関』、 柳田聖山

・椎名

ている。

○抄者未詳 『無門関抄』 (写)寿岳章子氏

F、その他未調査の本あり ○抄者未詳『禅宗無門関抄』 (写)叡山文庫

Dの幻住派僧は九州の博多とか対馬で活躍し、 中国や朝鮮との外交にも当った僧たちです。

雪庭春積の 『無門関抄』は洞門のものであったわけですが、 洞門抄物にどのようなものがあるかというのを見たの

が (資料3)です。

(資料3) 洞門抄物

仏書

臨済録抄

禅林類聚抄

(本則抄)

碧巌録抄

無門関抄

人天眼目抄

四部録抄

証道歌抄

大恵普覚禅師書抄

真歇和尚拈古之抄 金剛経川老頌抄

真州長盧了禅師却外録抄

天童和尚小参之抄

疎山大師根却語訣

重離畳変訣抄 自得禅師語録抄

曹山绿抄

投子山妙続大師語録抄

江湖風月集抄

集部

国書

永平元禅師語録抄 聯珠詩格抄

大智禅師偈頌抄

伝法偈下語抄

禅公案拶語並代語抄

百八十二公案抄

巨海代抄

鉄山牛和尚下語抄

勝国和尚再吟 天南代語抄

恵林永明禅師代語抄 句双葛藤集

鉄外和尚代抄 龍洲代抄

天益和尚公案百則鈔

ほかに門参・切紙あり。 (後掲

鉄外和尚再吟

扶桑大暾禅師説吟

高国代鈔

寿松和尚下語抄

溢益和尚再吟

大淵和尚再吟

火堯和尚再吟

大淵代抄

天南和尚再吟

貫之梵鶴和尚代語抄

— 88 **—**

仏書が中心ですが、『江湖風月集抄』や『聯珠詩格抄』もあります。

抄物を作成した人たちに注目すると次のような人たちがいます。

〔仏家〕 五山禅僧・足利学校・大応派僧・幻住派僧、曹洞宗僧、 禅宗以外の僧

武家

[その他]博士家(清原家)・神道家(吉田家)、医家、

曹洞宗の僧が作成したものは既に見たところです。曹洞宗僧以外の人たちが作った抄物を挙げたのが、

(資料4)

で

(資料4) 抄物の種類(資料3以外)

す。

(漢籍

経部 周易抄 易学啓蒙通釈抄

左伝抄

孝経抄 尚書抄

千字文聞書

漢書抄 孟子抄 十八史略抄

子部 史部

三略抄 史記抄 論語抄 月令抄

六韜抄

医学正伝或問抄

察病指南抄 医学入門発談 蒙求抄 全九集 医方大成論抄

運気抄

老子経抄

荘子抄

注能毒

八十一難経抄 格致余論抄

韓文抄 玉塵 (韻府群玉抄) 長恨歌抄 詩学大成抄

琵琶行抄

集部

杜詩抄

柳文抄

本草序例抄 局方発揮抄

明医雑著抄

曲礼抄

毛詩抄

大学抄

韻鏡聞書

悉曇字記抄

中庸抄

— 89

									[国書]				[仏書]			
実語教注	三教指帰私記	秘蔵宝鑰聞書	浄土和讃註解	職原抄聞書	貞永式目抄	野馬台詩抄	禅儀外文集抄	自戒集	錦繍段抄	法華経和解	正宗賛抄	日用清規抄	臨済録抄	中興禅林風月集抄	蒲室集抄	胡曽詩抄
雑筆略注	王沢不渇鈔聞書	御請来録私聞書	和漢朗詠集抄	伊勢物語惟清抄	建武式目注	庭訓往来抄	作物記抄	湯山聯句抄	続錦繍段抄		施餓鬼抄	六物図抄	碧巌録抄	古文真宝前集抄	二十四孝抄	東坡抄
宣明曆鈔	金剛界礼懺文私	性霊集聞書	厳島願書和解	源氏物語帚木注	十七条憲法注	日本書紀抄	大仏鐘銘抄	江東識廬三千句抄	中華若木詩抄		父母恩重経抄	四教儀抄	無門関抄	古文真宝後集抄	聖蹟図抄	山谷詩抄
八卦抄	光明真言句義釈抄	以呂波聞書	間狂言抄	古今集童蒙抄	令聞書	中臣祓抄	永源寂室語録抄	成句便覧	花上集抄		般若心経抄	首楞厳経抄	虚堂録抄	阿房宮賦抄	三体詩抄	山谷演雅詩抄
簠簋抄	太子伝抄	御遺告抄	太平記抄	親鸞伝絵聞書	江次第抄	麗気記聞書	謡抄	聚分韻略抄	五山詩文集抄		仏祖三経抄	盂蘭盆経抄	百丈清規抄	聯珠詩格抄	江湖風月集抄	瀟湘八景詩抄

なものをご報告できるようにしたいと思っています。 国書のうしろの方には禅宗以外の宗派の僧たちが作ったものをあげてあります。まだきちんと整理できてなく、 正確

て、書き入れ仮名抄と呼んでいます。書き入れ仮名抄は多くの原典に認められますが、 それから、更に、抄物には一つの本の形になっているもののほかに、 原典の中に書き入れがされているものがあっ 一書の抄物になっていないも

ので書き入れ仮名抄があるものとして(資料5)にあげたような資料が見つかっています。まだいろいろあるのでは

ないかと思われます。

(資料5)書き入れ仮名抄 (抄物の伝存しないもののみ掲出

〔漢籍

史部 孝行録

子部

帝範

七書

太宗問対

三註

列子

集部 百二十詠詩注 婦人寐寤艷簡集

(国書) 仏書 寸楮集 金句集 隆興仏教編年通論 意伝普救録 医学指南篇 禅林僧宝伝 啓迪集 見宜薬方 嘉泰普灯録 道三医書 施食通覧 城西聯句

私ははじめ「書き込み仮名抄」と呼んだのですが、阿部先生から、書誌学では「書き込み」という言葉はあまり使わ 吾妻鏡 管蠡抄 扣門瓦子 丈六開山金岡禅師法語

惟高詩集 道三切紙

ない、「書き入れ仮名抄」の方がいいだろうとお教えいただいて、「書き入れ仮名抄」と呼ぶようにしたものです。そ

— 91 —

一叢林所部抄卷上幼學詩句 (図版8)『幼学詩句』(駒沢大学図書館蔵)巻首

ういう資料がたくさんあって、阿部先生からは、原典の

|二天ダラ云ダゾ天ト云公天子一人火天子ノ外二友ノ思ラカフム 東山如月和尚撰

|月、友ノーソ朋ノ字、月ラナス、テ書ノ、双日と一日人心ソ美 ルホト三一天ト云火双日八明十四人七十一對三一天三付ラレタ人双 モッケウグす地尺天ト云アアリず地ともツケウシを十雪ト云 、多う字ソ此い事文類聚ニアルと一天二公里月上七重久上 日ヲカサチテカケの目ノ子ソ全里タト云いグノ字ヲカサヌレ 月上み月上云了了りまり、ちろくと一月ノ心と重月上云了了り

究資料として利用できるものと考えています。

原典に対する注釈ではなくて、用語をいろいろ集めてきて、それを抄物と同じような片仮名交りゾ体の文体で説明し 時に、一方で漢詩や聯句を作るための用語を集めて、それに注をつけているというようなものがたくさん出て来ます。 たりするために、蘇東坡の詩だとか、黄山谷の詩だとかに対して抄物を作りますが、そういう原文の漢詩を読むと同 りのない命名で、もっとすっきりした命名はないものかと思うのですが、例えば、禅僧が漢詩を作ったり、聯句を作っ 抄物には更に、「特定の原典を持たない一種の抄物」があります。これは、私が便宜つけた名前で、ちょっとしま

釈しているものとがあって、はじめて書き入れがされて 典に書き入れているものと、はじめて書き入れをして注 書き入れの抄物の中には、後の抄物から抜き書きして原 なお言葉をいただいたことなども思い出します。その、 これはきりがないことになるのではないか、というよう 本文の中に書き入れがしてあるものまで集めていたら、

た、言語資料としても興味深いものです。また、ある抄 いるものというのは、抄物の成立を考える上からも、

物から抜き書きして原典に書き入れているものは、本文 が変容していたりして、これもまたそれなりに日本語研

怪しい書名のものは借り出して拝見するというようなことをして見つけています。それらは、今まで見たところでは、 きました。このような資料が沢山あって、書名からは抄物であるのかどうかわかりませんから、調査に行くと、何か ているようなものを、「特定の原典を持たない一種の抄物」と呼んでみました。(図版8)に『幼学詩句』をあげてお

(資料6)のように、⑴から⑺までのように類別することができるのではないかと考えています。

(資料6)特定の原典を持たない一種の抄物

(1)詩文を作成するためのもの 『幼学詩句』『金玉和襟集』『芙蓉集』『継天筆語』『四六文章法』等

(2)禅の教義を理解するためのもの

門参・切紙 『〔曇英派門参〕』 『〔快庵派門参〕』 『〔一州派本参〕』 等 東国語系

『古則公案』『碧巌集密参』『碧前碧後臨済録密参』『公案密参録』等

③医学的知識を得るためのもの 『月海雑録』『和名集并異名製剤記』『日用食性』『玄冶薬方口解』等

(4)神道の教義を理解するためのもの 『祓八ケ大事』『梵天帝釈委注』『参詣口決之大事』『神祇正宗秘要』『神道之

祓祭文条々(諸解除抄)』『休塵聞書』『諸神記』『文類抄』『豊満社中縁起』『雑記』『神宗国源論

『官服聞書』『百官和秘抄』『暦家秘道私記』『名目鈔』『逆耳集』等

(6)辞書・事典

(5)有職故実・教訓を学ぶためのもの

語書 節用集・色葉集・『運歩色葉集』『いろは字』『塵芥』等

類書 『和名集』『宣賢卿字書』『詞源要略』

韻書 『海蔵略韻』 『古澗略韻』 『広益略韻』 『円車広略韻』 『〔韻書草稿〕』 等

『鹿苑日録』『策彦和尚初渡集』『策彦和尚再渡集』『大徳寺真珠庵文書』『墨跡之写』等

(6) は、 辞書や事典の側から抄物に近づいてくるものです。 辞書・事典で語を集めているところに注がつけてあるもの

その注がゾ体であるものも出て来るので、これを六番目としておきました。

があり、

室町時代の抄物を利用していろいろな著作が作られています。これにどんなものがあるのか、私はまだ限られた資料 抄物には、更に抄物を利用した著作があります。『本朝詩仙註』『卜筮元亀鈔』『高砂増々抄』などといった資料で、

言絶句があがっていますが、平仮名交り文を見ると、その文は、(図版10)の『中華若木詩抄』の抄文とほとんどそ しか捉えていませんが、(図版9)には『本朝詩仙註』の例をあげておきました。百人一首のような絵があって、七

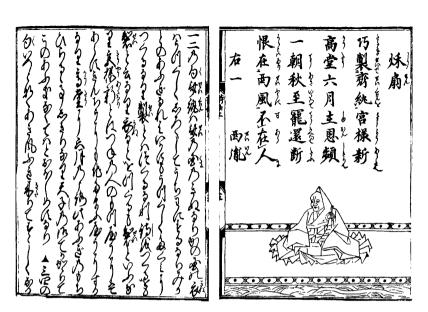
全体像を、上の方から見て行くと、九六頁の図のようになります。 抄物を下の方、雪庭春積の『無門関抄』から、『無門関抄』全般、仏書へというように上がってきたのです

な資料がどのような広がりを見せているのかということにも注目していますが、まだ十分に力を注いでいません。 のままの形です。『中華若木詩抄』が『本朝詩仙註』という本に変身しているというような資料もあって、このよう

しての注釈の中は、 て、特定の原典に対する注釈には一書の形に成書としてまとまっている注釈と、原典への書き入れとがあり、 抄物には、特定の原典に対する注釈と特定の原典を持たない一種の抄物と、それから、 漢籍・仏書・国書に分けることができ、例えば、その仏書の中に『臨済録抄』『碧巌録抄』『無門 抄物を利用した著作とがあっ

関抄』というように原典の違いによって抄物があり、その『無門関抄』には天英祥貞抄、雪庭春積抄というように幾

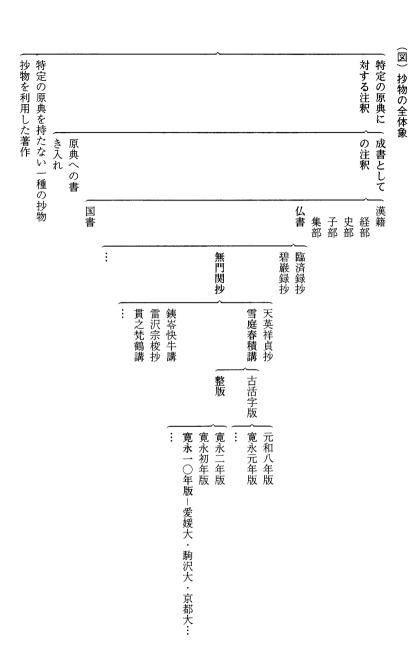
ということで、相当多数の資料に広がりを持っています。一体どのくらいの点数があるのか、版本の一々をも一点と 雪庭春積抄を見ると古活字版と整版とがあって、古活字版に元和八年版・寛永元年版などの諸版がある



(図版9)『本朝詩仙註』万治二年整版(国立国会図書館蔵)上3オ・ウ

巧製齊統官橫新高堂六 ニモタルハヤウニスルソ高堂 二六月 边コノ扇 カ細ト云ソ官 様新ハ常ノ者ノモツ様テハナイソ内妻 七詩ヲ作ルニモ製ト デソ衣ナントラツクルニモ製 テ居 タカヨイセ モ 用コルモノナイホトニツイショウカ無 用 也ロラ酸 テ 用ラレンカト 恩テ 人ニジイショララメトワルサレト レハイカニモウツクシク巧ラツクシテ作人製ハ ウツクシク白ノ如 二ノ旬ハ齊統 斷恨在西風不在 ノルモソコルアリトミへタ常 秋扇 雪十川園扇ニスルベハ脅ノ國ノキ又人齊ノ 月主 オ 朝 **ラフルウ** 秋 作扇又

(図版10) 如月寿印抄『中華若木詩抄』(成城大学図書館蔵) - 1 ウ



数えた時に全体で何点あるのかということが気になりながら数える機会がなく、そのままになっています。 このように多量の抄物があるのですが、私は、戦後見つかった抄物の中で言語資料として一番面白く、重要な資料

は、(図版11)にあげた前田育徳会尊経閣文庫蔵の『論語講義筆記』という資料ではないかと考えています。

(図版1)『論語講義筆記』(前田育徳会尊経閣文庫蔵)三24オ

エリカテムをサムソウマイト申で のヨラーとこれが 三次会アルンにまからかくトもラハスタメいるちアリロカ 本や八億や伊勢やり条やりこみ、ソとく、用するソ人が打・用りき とうくなモッタル植れりせやトタホトラン ララー・アカラテラ · リナンサラハトテ本君子/道》同义多目君子八大丈心=テムツタ ハコショナノノカウタミモアラハおこうであることへ、なっとこイン仲ら 共大食をでかせテガ入ソウへサノモワヒコトナメサレントるやる大·な 夏日高用いれるけれず安申テソウソ人へ死去天命すり まカナイン テい申りと金田君子八人りときりョナヤストと内と省テラン 事り心えケヤホトミみ作り、ョー そこアーリスノナイト思う重 トアルカ君子ソナショニト云八君子心力はきるしそも可らかが用し ト思テ重テの中ダン会回にラハ行りカ大りたホトラスリモス キイテわラツラろれとる作と可らかアラリが大分り入ろすイ こるろし人六時モカアリ我六十十十年ルン

版の部分は、司馬牛が孔子に、君子という版の部分は、司馬牛が孔子に、君子というという禅僧が講義をして、それを弟子の誰かが聞書したもので、書写時期は寛正六載からあまり遠くない時期と見られます。図がらあまり遠くない時期と見られます。図がらあまり遠くない時期と見られます。図がの部分は、司馬牛が孔子に、君子という版の部分は、司馬牛が孔子に、君子という

たのはどういう人をいうのですか、と尋ねているところです。注目されるのは9行目といるところです。注目されるのは9行目とと、断定の助動詞に「ヂヤ」を用いる一方、と、断定の助動詞に「ヂヤ」を用いる一方、と、断定の助動詞に「ヂャ」を用いる一方、とのはどういう人をいうのですか、と尋ねてのはどういう人をいうのですか、と尋ねてのはどういうという。

定の助動詞に「ダ」を用いていることです。

「ダ」と「ヂャ」というのは文体の差であって、現代語で「何々だ」と書いたり、「何々である」と書いたりするよう を講義するのに、幼少の頃に住んでいた丹後の方言を交えたとはちょっと考えにくいことですから、断定の助動詞 も断定の助動詞に「ダ」を使う地域で、そういう点が問題になって来ます。しかし、「幼にして」というわけですか 之後州人也、自幼籍名於龍阜」とあって、生まれが丹後の国であったことが問題となります。丹後の国は現代方言で たということになって来ます。ただそれについては、蘭坡景茝の『雪樵独唱集』の中に希頊周顓について、「希頊丹 とになって来て、「ダ」と「ヂャ」についても、またこれが東の言葉と西の言葉の違いというようなことではなかっ と、京都三条六角通りで講義された『論語』の講義で「ダ」と「ヂャ」と両方が使われていた可能性が高いというこ 東の方で「ダ」、西の方で「ヂャ」という分布をしているわけですけれども、室町時代、一四六五年頃に遡ってみる 用して「ダ」が交じるという形になっていますが、巻五以下になると「ヂャ」をほとんど専用するという形になって というふうに、ほとんど同じ文脈で使われています。巻によって出て来る用例数が偏っていて、巻一・二・三の三巻 と両方が出て来るといった具合です。全体ではどのように出て来るかというと、「ダ」が七十三例、「ヂヤ」が二百二 「クセヤト」は「クセヤツ」(曲奴)が音転訛を起こしているものと考えられます。二行隔てた所に「ヂヤ」と「ダ」 います。これを見ると、断定の助動詞「ダ」と「ヂャ」というのは、(図版1)の地図に見るように、現代方言では では「ダ」を多用し、「ヂャ」が時々交じるという形になっています。巻四になると、それが逆転して、「ヂャ」を多 こ」に対して「ヂャホドニ」、「ダガ」に対して「ヂャガ」、「ヂャニ」には「ダニ」が見えませんが、「ダヲ」「ヂャヲ」 十六例使われていて、両方とも相当の数使われています。使われ方に何か違いがあるのかと見てみますと、「ダホド 幼少の頃にもう京都に出て来て龍阜つまり南禅寺に入っています。成人して三条六角通りで僧たちを前に『論語』

に、前半部分では「ダ」という助動詞で書き、後半部分では「ヂャ」という助動詞で書くというように文体を変えて いるのではないかと考えます。

てはならなくなるような言語事象が見つかる資料がまだまだあるのではないかと考えています。 このように抄物には厖大な資料が残っていますので、丁寧に全資料を読んでいくと、日本語の歴史を書き換えなく

に考えています。拙い発表でございましたが、以上で私の発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございま らいろいろお教えいただいて、それをきちんと踏まえて、日本語の歴史の研究を今後も進めていきたいと、そのよう て来る場ではないかと思われますが、書物、書誌学の知識と、それから、 今回の公開講座のテーマは「書物と日本仏教」で、私のような分野外の日本語の歴史を研究しているような者が出 仏教学の知識とを、両方の研究者の方々か

した。(拍手)

(付記) があります。(柳田 発表の録音記録の表現を整えたところがあります。また、 図版・表・資料に、除いたもの、手を加えたもの

了